

島崎藤村作

一人の兄弟、  
幸福

朗読 岡野尚子

第6卷 4. 島崎藤村「二人の兄弟」「幸福」



島崎藤村（しまざき とうそん）

1872年（明治5）・1943年（昭和18）。長野県馬籠村生まれ。明治学院卒業後、北村透谷らと「文学界」を創刊。処女詩集「若菜集」によって抒情詩人として名声を獲得したが、抒情詩の形式と自分の思想とに違和感を感じ、自然と人生の観察を深めるため散文（小説）に転じた。1906年（明治39）「破戒」を出版、田山花袋の「蒲団」と共に、日本の自然主義文学を確立したとも言われている。他に「新生」「夜明け前」等の代表作があり、児童文学への関心も深く「幼きものに」「ふるさと」等がある。本編のあらましは、「木の実を取ろうとする兄弟がいたが、弟は気が短く兄は気が長く共に実を採れない」（二人の兄弟）、「人の心を知るために乞食姿で家を訪ねる」「幸福」は犬に追い立てられ、鶏には用心深く鳴かれる。だが兎がグウグウいびきをかいている家があった」（幸福）というもの。「二人の兄弟」の発表年月は不明、「幸福」は1921年（大正10）1月、「婦人の友」に発表された。

一 榎木の実 えのき み

皆さんは榎木の実を拾ったことがありますか。あの実の落ちて居る木の下へ行ったこと  
がありますか。あの香ばしい木の実を集めたり食べたりして遊んだことがありますか。

そろそろあの榎木の実が落ちる時分でした。二人の兄弟はそれを拾うのを楽たのしみにして、  
まだあの実が青くて食べられない時分から、早く紅あかくなれ早く紅くなれと言って待つて  
居ました。

二人の兄弟の家いえには奉公して働いて居る正直いいな好いお爺じいさんがありました。このお爺  
さんは山へも木を伐きりに行くし畠はたけへも野菜をつくりに行つて、何でもよく知つて居まし  
た。

このお爺さんが兄弟の子供に申しました。

「まだ榎木の実は渋くて食べられません。もう少しお待ちなさい。」とそう申しました。

弟は気の短い子供で、榎木の実の紅くなるのが待って居られませんでした。お爺さんが止めるのも聞かずに、馳出かけだして行きました。この子供が木の実を拾いに行きますと、高い枝の上に居た一羽わかしどりの櫃鳥かしどりが大きな声を出しまして、

「早過ぎた。早過ぎた。」と鳴きました。

気の短い弟は、枝なに生なって居るのを打ち落とすつもりで、石ころや棒を拾っては投げつけました。その度たびに、榎木の実が葉と一緒になって、パラパラ落ちて来ましたが、どれもこれも、まだ青くて食べられないのばかりでした。

そのうちに今度は兄の子供が出掛けて行きました。兄は弟と違って気長な子供でしたから「大丈夫だいじょうぶ、榎木の実はもう紅くなって居る。」と安心して、ゆっくり構えて出掛けて

行きました。兄の子供が木の実を拾いに行きますと、高い枝の上に居た檀鳥がまた大きな声を出しまして、

「遅過ぎた。遅過ぎた。」と鳴きました。

気長な兄は、しきりと木の下を探し廻りさがまわしましたが、紅い榎木の実の一つも見つかりませんでした。この子供がゆつくり出掛けて行くうちに、木の下に落ちて居たのを皆みんなな他の子供に拾われてしまいました。

二人の兄弟がこの話をお爺さんにしましたら、お爺さんがそう申しました。

「一人はあんまり早過ぎたし、一人はあんまり遅過ぎました。丁度好い時を知らなければ、好い榎木の実わたしは拾われません。私わたしがその丁度好い時を教えてあげます。」と申しました。

ある朝、お爺さんが二人の子供に、「さあ、早く拾いにお出いでなさい、丁度好い時が来ま

した。」と教えました。その朝は風が吹いて、榎木の枝が揺れるような日でした。二人の兄弟が急いで木の下へ行きますと、檀鳥が高い枝の上からそれを見て居まして、

「丁度好<sup>い</sup>い。丁度好<sup>い</sup>い。」と鳴きました。

榎木の下には、紅い小さな球<sup>たま</sup>のような実が、そこにも、ここにも、一ぱい落ちこぼれて居ました。二人の兄弟は木の周囲<sup>まわり</sup>を廻<sup>まわ</sup>って、拾っても、拾いきれないほど、

それを集めて<sup>たのし</sup>楽しみました。

檀鳥は首を傾<sup>かし</sup>げて、このありさまを見て居ましたが、

「なんとこの榎木の下には好<sup>い</sup>い実が落ちて居ましょう。沢山お拾いなさい。序<sup>ついで</sup>に、私も一つ御褒美<sup>ごほうび</sup>を出しますから、それも拾って行って下さい。」と言いながら青い斑<sup>ふ</sup>の入った小さな羽を高い枝の上から落してよこしました。

二人の兄弟は榎木の実ばかりでなく、檀鳥の美しい羽を拾い、おまけにその大きな榎木

の下で、「丁度好い時」までも覚えて帰って来ました。

## 二 釣りの話

ある日、お爺さんじいは二人の兄弟に釣りの道具を造つて呉くれると言いました。

いかにお爺さんでも釣りの道具は、むずかしからう、と二人の子供がそう思って見て居いました。この兄弟の家の周囲うち まわりには釣竿つりざお一本売る店がありませんでしたから。

お爺さんは何処どこからか釣針さかを探して来ました。それから細い竹を切つて来まして、それで二本の釣竿を造りました。

「針と竿が出来ました。今度は糸の番です。」とお爺さんは言つて、栗くりの木に住む栗虫か

ら糸を取りました。丁度お蚕かいこさまのように、その栗虫からも白い糸が取れるのです。お爺さんは栗虫から取れた糸を酢つに浸けまして、それを長く引延しました。その糸が日に乾かわいて堅くなる頃ころには、兄弟の子供の力で引いても切れないほど丈夫で立派なものが出来上りました。

「さあ、釣りの道具そろが揃そろいました。」と言って兄弟に呉くれました。

二人の子供はお爺さんが造った釣竿さを手に提さげまして、大喜びで小川の方へ出掛けて行きました。小川の岸には胡桃くるみの木の生はえて居る場所がありました。兄弟はかじか鱒まの居いそうな石の間を見立てまして、胡桃の木のかげに腰を掛けて釣りました。

半日ばかり、この二人の子供が小川の岸で遊あそんで家うちの方へ帰かえって行きますと、丁度お爺さんも木を一しよぱい背負しょって山の方から帰かえって来たところでした。

「釣つれましたか。」とお爺さんが聞ききますと、兄弟の子供はがっかりしたように首を振りま



した。賢いお魚は一匹ひきも二人の釣針に掛かりませんでした。

その時、兄弟の子供はお爺さんに釣りの話をしました。兄はゆっくり構えて釣って居たものですから釣針にさした餌えさは皆みんなな鰍たべに食られてしまいました。

弟はまたお魚の釣れるのが待遠しくて、ほんとに釣れるまで待つて居られませんでした。

つい水の中を搔かきまわ廻すと、鰍みんなは皆みんなな驚いて石の下へ隠れてしまいました。

お爺さんは子供の釣りの話を聞いて、正直な人の好きそうな声で笑いました。そして二人の兄弟にこう申しました。

「一人はあんまり気が長過ぎたし、また、一人はあんまり気が短過ぎました。釣りの道具ばかりでお魚は釣れません。」

「幸福」がいろいろな家へ訪ねて行きました。  
しあわせ 「幸福」 たず

誰でも幸福の欲しくない人はありませんから、どこの家を訪ねましても、みんな大喜びで迎えてくれるにちがいません。けれども、それでは人の心がよく分りません。そこで「幸福」は貧しい貧しい乞食こじきのような服装なりをしました。誰か聞いたたら、自分は「幸福」だと言わずに「貧乏」だと言うつもりでした。そんな貧しい服装をしていても、それでも自分をよく迎えてくれる人がありましたら、その人のところへ幸福を分けて置いて来るつもりでした。

この「幸福」がいろいろな家へ訪ねて行きますと、犬の飼ってある家がありました。そ

の家の前へ行つて「幸福」が立ちました。

その家の人は「幸福」が来たとは知りませんから、貧しい貧しい乞食のようなものが家の前にいるのを見て、

「お前さんは誰ですか。」

と尋ねました。

「わたしは『貧乏』でございます。」

「ああ、『貧乏』か。『貧乏』は吾家<sup>うち</sup>じゃお断りだ。」

とその家の人は戸をぴしゃんとしめてしまいました。おまけに、その家に飼つてある犬がおそろしい声で追い立てるように鳴きました。

「幸福」は早速ごめんを蒙<sup>こうむ</sup>りまして、今度は鶏の飼つてある家の前へ行つて立ちまし

た。

その家の人も「幸福」が来たとは知らなかったと見えて、いやなものでも家の前に立ったように顔をしかめて、

「お前さんは誰ですか。」

と尋ねました。

「わたしは『貧乏』でございます。」

「ああ、『貧乏』か、『貧乏』は吾家<sup>うち</sup>じゃ沢山だ。」

とその家の人は深い溜息<sup>ためいき</sup>をつきました。それから飼ってある鶏に気をつけました。

貧しい貧しい乞食のようなものが来て鶏を盗んで行きはしないかと思ったのでしよう。

「コッ、コッ、コッ、コッ。」

とそこの家の鶏は用心深い声を出して鳴きました。

「幸福」はまたそこの家でもごめんを蒙りまして、今度は兎うさぎの飼つてある家の前へ行って立ちました。

「お前さんは誰ですか。」

「わたしは『貧乏』でございます。」

「ああ、『貧乏』か。」

と言いましたが、そこの家の人が出て見ると、貧しい貧しい乞食のようなものが表に立っていました。そこの家の人も「幸福」が来たとは知らないようでしたが、なさけというものがあると見えて、台所の方からおむすびを一つ握つて来て、

「さあ、これをおあがり。」

と言ってくれました。その家の人は、黄色い沢庵たくあんのおこうこまでそのおむすびに添えてくれました。

「グウ、グウ、グウ、グウ。」

と兎は高いいびきをかいて、さも楽しそうに昼寝をしていました。

「幸福」にはその家の人の心がよく分かりました。おむすび一つ、沢庵ひときれ一切にも、人の心の奥は知れるものです。それをうれしく思いまして、その兎の飼ってある家へ幸福を分けて置いて来ました。